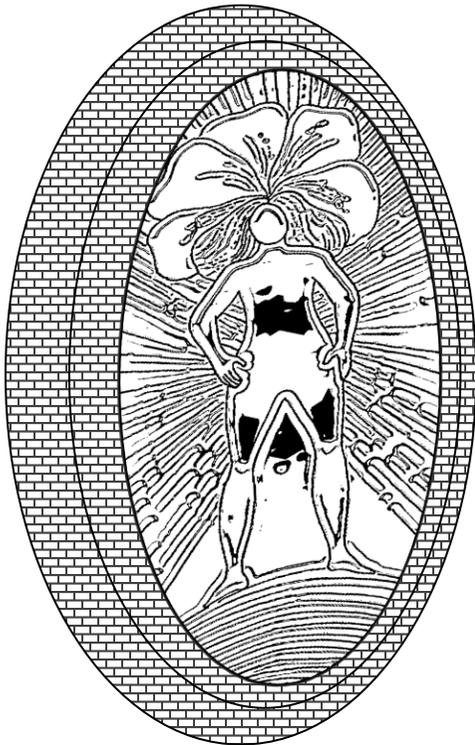




# Women's Action

FGM廃絶を支援する女たちの会

# Against FGM, Japan



## 目次

巻頭言	2
反 FGM 基金交付先からの報告	3
/ラパラール	
女性の身体と文化	8
グローバルフェスタ 2022	12
海外情報	13
お知らせ	14

**Vol.92**

**2022年 11月30日 発行**

〒270-2203 千葉県松戸市六高台 2-4-12

E-mail: [waaf@jca.apc.org](mailto:waaf@jca.apc.org)

URL: <http://www.jca.apc.org/~waaf/>

<https://www.facebook.com/womens.action.against.fgm.japan>



## 巻 頭 言

## グローバルフェスタ 2022 に参加しました

こんにちは！最近益々寒くなって参りましたね。私の住む埼玉・熊谷でも夜は特に冷え込み、先日は寒さで夜中に目を覚ましたほどです。

今回のニュースレターの記事にもありますが、WAAFは10月1・2日の2日間、都内で開催された「グローバルフェスタ 2022(以下 GF)」に2年ぶりに参加いたしました。実のところは昨年度のGFにも参加しましたが、GFの公式 Web サイトに WAAF の HP のリンクが貼られるだけ、という完全オンラインでの参加形式でした。ただそれだけでも、WAAF の HP のアクセス数が2日間だけで大幅に伸びる等、イベントに参加する効果を感じていました。

しかし今年度の GF は対面型を中心とした開催方式に切り替わったため、スタッフの COVID19 感染等の心配はありながら WAAF もリアル会場での出展を決めました。当方も2日間の限られた時間帯だけでしたが実際に参加して感じたのは、直接参加者の顔を見て話しができるのはやはりいいものだなということです。COVID19 の拡大以降、ウェビナー等が浸透し WAAF でもオンラインイベントを開催してはいますが、一度に多くの方に対して(ほぼ)一方通行にではなく、相手の顔色や反応を見ながら、それに合わせてこちらの話の仕方や内容を変える等、考えや思いを相互に出しながら FGM について語る機会は久しぶりで大変新鮮でした。

それに関連して、2日間の中で最も印象に残った、来場者の方からのお言葉があります。それは FGM がどのような地域でなぜ行われているかを説明したときのことで、「周りのみんながやってるならやっちゃうよね～」とその方は仰ってブースを後にされました。FGM を「そういうもの」として受け止められることは自分の周りでも WAAF のイベント等の際でもあまりなかった

ので、「そういうリアクションになるのか～」とこれまた新鮮な気持ちになりました。GFをはじめオフラインのイベントは FGM に元々関心のない人にも知って頂ける絶好の機会です。来年度もどうなるか分かりませんが、大切な活動の場の1つと改めて実感しました。



立園裕美



ある助産師は、「出産を控えた女性の多くは、出産時に苦しんでいる」と話してくれた。彼女自身が切除されたからこそ、事実を知った上で話している。

ある女性から切除の体験談があった。「20年以上前のことだが、施術師が来た日、勉強しようと思っていた私を、両親が学校に迎えに来て、施術師に引き渡そうとした。その日、先生は私を親に引き渡すことを拒否し、親を糾弾するぞと脅した。私は逃げられてとても嬉しかった。しかし夕方、家に帰ると、家に施術師の女性がいて、姉やおばさんたちが私を切除するように押さえつけた。私はあざがで、何の希望もなくなった。恥ずかしくて学校にも戻りたくなかった」

村では、女性たちはFGMが性的、社会政治的、経済的なレベルでもたらす影響について認識するようになった。女性たちは、この村の素晴らしい自発性を賛美し、自らの経験を語るようになったのだ。コミュニティ・アクションのフォローアップのために連絡先を交換した。

女性たちは、ヘルスセンターと分娩台の支援を求めている。確かに、雨季に雨が降ると、出産に来た女性の上に水が流れ、女性や新生児の命が危険にさらされることがある。

## 活動2：ムバンバラ村での啓発活動

この啓発活動は、6月19日に、貯蓄信用村協会（AND GUEUM SA BOPP）の会長の自宅で行われたものである。

今回のFGMに関する講演は、非常にレベルが高く、科学的で実りの多いものだった。FGMをよりよく定義するために、女性の体験と質疑応答に基づいて行われたため、参加型の講演となった。ファシリテーターの助産師は、FGMの定義について、クリトリス切除、摘出、陰部縫合の概念を明快にしてくれた。

講演では、これらの慣習の背景にある社会的な理由について説明した。女性の生殖能力を高めるため、女性の純潔を確保するため。つまりは女性の性欲を抑えるため、言うならば結婚の貞操を守り、少女の処女を結婚まで守るため、思春期から女性への通過儀礼としての役割、文化・宗教的伝統を守るため（FGMがイスラム教や先祖から課せられたものと考えられる人も）、医療行為の一形態としての役割（民族によっては、クリトリスが病気の元と考えている人も）のためとされている。

彼女は最後に医学的な視点からのFGMの影響（痛み、出血、尿を出すときに熱くなる、B型肝炎やHIV/AIDSなどの血液感染症のリスク〔集団的切除の際に鋭利な器具を使用するため〕、繰り返す尿路感染症、不妊症、フィスチュラ）を示し講義を終えた。健康に関わる技術者として、彼女は医学的な影響を強く主張した。この講演によって、後に先進的な女性特有の病気に関する

る医療施設の連絡先を交換することができた。村の女性たちは、勤務先であるティエス市の地域病院へ訪問することを約束した。

### 活動3：ティエスのマリクシ高校での啓発活動

2022年6月22日、私たちは学生たちと共にFGMに関する啓蒙活動を実施した。朝9時から部屋にメッセージを掲示し、音響システムを設置した。校長から意識改革を評価され、充実した一日となった。理系の最優秀女子の表彰と偶然に重なったため、予想以上に多くの生徒が動員された。



初めにコーディネーターからラパラブールと当プロジェクトの経済援助を行なっているWAAFについて、団体の略称の意味を英語に続いてフランス語に翻訳して紹介した。その中で、コーディネーターから生徒たちに対して授業のように参加型でFGMの定義を行った。「FGMは、女性の外性器の全部または一部を切除するすべての外科的介入を含む」

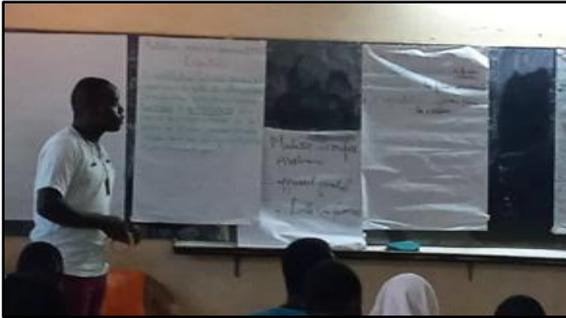


生徒たちによるこの定義の後、看護師がFGMの原因と結果、つまり社会文化的、民族的な由来について話した。彼女は、FGMがもたらす医学的な影響について、時には犠牲者として死に至ることもあることを強調した。学生たちはこの啓発活動を高く評価し、2022年から2023年にかけて、優秀な学生をFGM廃絶に向けたアンバサダーとして任命することを提案した。

### 活動4：パルセルアセ二校での青少年への啓蒙活動

コーディネーターは、WAAFおよびプロジェクトについて紹介し、啓発活

動の進捗状況について報告した。若者たちは FGM について感化され、FGM について自分たちの経験や知っていることを話してくれた。



ギニアのプルという集落で教師をしていた男性は、適切でない切除施術によって、1 人の生徒を失った。切除から 2 日後に教室に戻った少女は、授業中に出血し始め、呼び出された両親の前で学校当局に避難させられ、数日後に切除の大量出血のため息を引き取った。

進行役は特定の民族が FGM を行うに至った社会的側面を強調した。この点については、ラパラーブルの若者の中にも、女子の健康に非常に有害な伝統的慣習の言い訳だと考え反論している者もいる。



### 活動 5 : Sud FM でのラジオ放送

この活動では、FGM 問題の専門家を招き、ジャーナリストの質問に答えてもらうことで、リスナーに対する FGM の啓蒙と、プロジェクト実施団体のラパラーブルおよびドナーである WAAF の紹介を行った。

ラパラーブルと WAAF に関しては、プロジェクトマネージャーによって紹介された。ラパラーブルにとって、WAAF のように FGM を実践しているコミュニティでの啓発活動を積極的に支援しているパートナーを得たことは、とても良い機会だと語っている。

番組は、現地の言葉であるウォロフ語で、時にはフランス語を交えながら相互性を持った会話形式で行われた。記者の話が脱線しないように、プロジェクトマネージャーが質問を作成した。質問と回答の一部は以下の通り。

質問：法律はあるか？FGM を禁止する法律は、一般に知られているか？

回答：セネガルには FGM を禁止する法律が存在するが、国民にはほとんど知られていない。

質問：FGM を禁止するために、地域社会は何ができるか？

回答：地域社会は、FGM に関する法律を普及させながら、若い世代への啓発を続けることができる。

質問：FGM を糾弾した場合、誰が民事訴訟を起こせるのか？

回答：事実の証拠があれば、誰でも民事訴訟を起こすことができる。セネガルでは、このような行為で家族から被害を受けた女性が糾弾されることはない。

質問：潜在的な FGM 被害者のケアを改善するために何ができるか？

回答：FGM の被害者のケアはとても良いことで、ラパラブルのような団体は、すでに被害者の受け入れ・宿泊センターを通じてこの分野で活動しているが、このような悪い事態を止めるために若い世代の意識改革に力を入れた方が良さそう。

質問：セネガルにおける FGM と統計の現状は？

回答：ラパラブルのようにこのテーマ（FGM）での活動をする NGO や、トスタン（Tostan）やその他の団体の活動は、FGM の原因と結果についての認識を高めることで成り立っている。1997 年から現在までの統計では、6,959 のコミュニティが FGM を放棄し、66 のコミュニティが FGM 放棄の宣言を書面にしている。

## 活動結果および提言

このプロジェクトのおかげで、170 人（村人や学生）、Sud FM ラジオのプログラムを通じて 1,000 人以上の人々に認知してもらうことができた。

提言としては、1）若い世代への啓発を継続する、2）FGM を禁止する法律を普及させる、3）ラジオ番組を複製化する、4）11 月と 12 月に教育現場での啓発を開始する、5）別プロジェクトで他校をターゲットにする、といった点が挙げられた。

この 5 つの活動を可能にした WAAF の資金援助に感謝する。

（報告まとめ：宮村暢子）

**お知らせ** 12月18日(日)10:00～11:15、『ピースボート・オンライン勉強会』にて WAAF スタッフがお話しします(FGM についての基本的な内容を予定しています)。 参加申し込み:<https://peaceboat.org/event.html>

\*\*\*\*\*

## 女性の身体と文化

昨年『グローバル・ディスコースと女性の身体』（宮脇幸生・戸田真紀子・中村香子・宮地歌織 編著・晃洋書房・2021年発行）を読み、最近『月経の人類学』（杉田映理・新本万里子編・世界思想社・2022年発行）を読んだ。『グローバル・ディスコースと女性の身体』はFGMを真正面からとりあげた論文集であるので意図的に読んだのだが、『月経の人類学』は新聞の書評で関心を持って読んだもので意図的に読んだのではなかった。ところが読んでみると、これらの二つの論文集は外性器と内性器という違いはあるもののどちらも女性の身体がローカルな文化の中でどのように位置づけられ、扱われているかを詳細に述べ、支援する側はどうあるべきかを考察するものであった。以下はこの二つの論文集を読んだ医学にも人類学にも無縁の一フェミニストの私の感想である。

『グローバル・ディスコース』はアフリカの現場でのフィールドワークを通して女性器切除（FGM/C）（原文ママ）について論じた本である。どの研究者もFGMは女性の身体に有害な影響を与えるものであり、廃絶すべきものであるという立場を取っている。その上で国連諸機関や国際NGOの主導によるゼロトレランス廃絶運動（注）は女性の身体を守る一方で、現場の女性、現地の文化を無視したグローバルな立場からの文化介入ではないかと問いかけている。

『月経の人類学』で取り上げるのは発展途上国と呼ばれる地域の女子生徒の月経対処である。研究者たちはローカルな月経観がある中で家庭や学校で女子生徒たちはどのように月経の時期を過ごしているのかを調査している。その上で現地の文化を尊重しながら「月経衛生対処（menstrual hygiene management:MHM）」というグローバルな支援をいかに「より良く行えるかの示唆になる」ことがこの本を編んだ目的としている。

月経とFGMは女性の身体に起きることであるが、FGMがある一部の地域でのみ行われている女性の身体への外科的介入であるのに対して、月経は女性なら誰もが経験する身体的かつ普遍的な生理現象である。従ってこの二つの現象を並べて見ていくことは適切ではないという考えもあるだろう。だが、FGMでひきおこされる困難と月経の困難は非常に強く結びついている。『グローバル・ディスコースと女性の身体』では「～陰部封鎖により月経時に激痛が走り、女子生徒の中退の原因になっている」と指摘されている。またWAAFホームページではFGMの後遺症として月経困難症があげられている。これは「月経血の排出が滞ることによって子宮内やさらに骨盤内に月経血が逆流したり、さらにそこに炎症が繰り返されることから、月経時にひどい痛

みを伴う」などの症状である。このように人為的な FGM が自然な生理現象である月経に強い困難をもたらすことがあるのだから両者は全く無縁のことからではない。月経の困難が解消されることと FGM を廃絶することはどちらも女性の健康にとって改善されるべき課題であると私は考える。

この二冊の本を読んでいくと月経と FGM には興味深い共通点があることが見えてくる。月経は初潮を迎えれば「結婚適齢期」になったと見なされ、地域によっては“初潮儀礼”が行われ、儀礼明けには僧侶や親族、近所の人たちにごちそうがふるまわれる。FGM はその儀式を通過することによって「結婚できる身体」になったと見なされ、ごちそうやプレゼントで祝われる。どちらも子どもを産むことが女性にとっての重要事項であるという社会的な意味づけである。



月経と FGM が女子生徒の学業を妨げる要素となっていることも共通している。月経時の手当の方法が十分に得られない地域においては女子生徒は月経期間中は学校を欠席してしまうことが多い。FGM 施術後の女子生徒の多くは（結婚適齢の“女”になったのだから）学業をストップしてしまう。そしてどちらも羞恥心を伴うことがらであり、公に話してはならない女性だけの秘密とされている。

また月経は古来から迷信につきまとわれてきた。古今東西を問わず、月経期間中の女性は「不浄」「穢れ」「不吉」「忌むべき者」「災いを招く者」として「祭礼や儀式」から排除され、様々な禁忌があり、住居地から離れた「月経小屋」に隔離されることもある。これらは迷信によるものである。

一方、2000 年以上も FGM が行われてきた理由は地域によって異なるが主な理由としては、「クリトリスは男性的特徴（ペニス）だから女性には適切でない」「女性の外性器は不潔で見苦しいから」「多産と安全な出産のため」「性欲が抑えられ貞節になる」などがある（WAAF ホームページより）。これらは医学的・科学的事実ではない。誤信である。

これらのことから月経と FGM には共通点が多いことが分かるが、月経衛生対処（MHM）と FGM 廃絶への取り組みに対する研究者たちの考え方、向き合い方には大きな違いがある。

月経については研究者たちはその土地のさまざまな文化の中で女子生徒たちが月経にどのように対処しているかをフィールドワークで調査している。そして「近年、月経衛生対処（menstrual hygiene management:MHM）が国際開発の重要な課題として認識され、その支援が広がっている」ことと同時に「現状では、国家政策やプログラムが外部支援によりもたらされても、その内容は人々の日々の現実からは乖離している」ことも指摘している。その上で「ローカルな現実や価値観を考慮しつつ」国際的な月経衛生対処（MHM）の取り組みと支援が必要であるとしている。肯定的で積極的な考え方である。

これは月経が世界中の女性に起きる身体現象だからその現実的な困難さが理解・同情・共感を得られやすいということが大きいのかも知れない。私には研究者たちは“現実の困難”に重きを置いて調査している、つまり、女性の健康そのものをローカルな文化よりも上位に置いているように思える。

一方、『グローバル・ディスコースと女性の身体』では、現在行われている廃絶運動の問題点をあげながら、もっと地域に密着した運動の在り方を提案している研究者も個々にはいる。フィールドワークの中で出会った多くの女性たちの話から FGM を是とする人々もいることが紹介されているのは興味深く読んだ。

だが、全体としては研究者たちは FGM の有害性は認めるものの、廃絶運動については FGM 廃絶が進まないのは国連諸機関や国際 NGO など外部の文化からローカルの文化への介入が原因であると一貫して主張、批判している。

その批判は FGM 廃絶活動の方法論の一つ“ゼロ トランス”（注）が地域の人々の多様性を無視した国連諸機関や国際 NGO からのトップダウンの強硬策であるためにかえって FGM 廃絶の目標につながっていないというものである。だが、WAAF は 25 年間アフリカ現地の FGM 廃絶活動団体のプロジェクトを支援してきたが、現地の草の根の活動団体は国連諸機関や国際 NGO、すなわち外部の文化からの支援を受けながら自分たちのイニシアチブで自分たちの文化に根付いた活動を展開している。（WAAF ニュースレター 91 号『FGM 廃絶プロジェクト現地レポートを読んで』参照）

世界中で普遍的に経験されている月経と異なり、FGM は“ある一定の地域においてのみ”で女性たちが経験する“固有”の事象である。この“ある一定の地域においてのみ”で行われる“固有”の事象であることが FGM がその地域の文化と深く結びついているということなのだろう。だが、FGM が土地の文化に深く結びついた慣習であろうがなかろうが、前に述べたように FGM が行われる理由には医学的な根拠も健康上の利点もない。逆に不衛生な環境で激痛と出血をとまなう施術をされ、時には命を失うこともある女兒・女子・女性を心身ともに傷つける慣習である。

アフリカ 28 ヶ国の FGM 廃絶活動団体が参加する IAC の正式名称は The Inter-African Committee on Traditional Practices affecting the Health of Women and Children (IAC)（女性と子どもの健康に影響を与える伝統的慣習に取り組むアフリカ委員会）であり、目的は eliminate Harmful Traditional Practices（有害な伝統的慣習を廃絶する）とある。（IAC ホームページ <http://iac-ciaf.net/>より・下線筆者）

1996 年に WAAF が国際シンポジウムを開催した時にゲストとして来日されたナイジェリア人のエリザベス・アラビさんの話された説明が今も印象に残っている。「私たちは有害な伝統的慣習を廃絶したいのであって自分たちの

文化の中の良い慣習は大事に次代へつなげていきたい。たとえばお年寄りを敬い大事にすること、伝統的なマッサージの方法など」。アフリカの文化を知っているのはアフリカ人自身である。

これがもし日本で女兒が何も知らされずに（たとえ知らされていたとしても）外性器を切除されたとしたらそれを文化と言うだろうか。女兒への加害であり、犯罪である。自国で犯罪とされるような行為が他国で行われている時、それをその国の文化であり、多様性だとして見過ごしていいものだろうか。他国で声をあげている人々がいる時に連帯の手を差しのべ支援することは文化介入だろうか。もちろん廃絶活動の支援はそこに住む人々の生活と文化を尊重してていねいに行うべきことは自明の理である。

私は女性の身体と人権はどんな文化よりも上位にあると考える。

（伊藤充子）

注：ゼロトレランスとは「FGMはどんな形であれ絶対に許さない」という決意の表明であり、目標。WAAF ニュースレター90号「ゼロトレランスと私たち」を参照。



## 反FGM基金への募金のお願い

反FGM基金（英語名：WAAF Fund）は、FGM廃絶のために活動している当事国団体に資金支援を行うためにWAAFが1997年に創設した基金です。会員だけでなく広く一般に募金を呼びかけています。寄せられたお金は全て当事国の活動に使われます。交付先は「反FGM基金交付検討委員会」にて決定し、基金の運営については年次総会で報告します。

これまでギニア、ケニア、カメルーン、セネガル、ナイジェリア、ブルキナファソ、タンザニア、スーダン、ガーナ、ウガンダ、ソマリランド、エジプト、シエラレオネ、リベリア、エチオピア等のNGOへ資金支援を実施してきました。

皆様のご賛同をどうぞお願いいたします。

◆反FGM基金の振込先 郵便振替：00190-2-355679

口座名：FGM廃絶を支援する女たちの会

10月1日(土)・2日(日)に東京国際フォーラム ホールで開催されたグローバルフェスタ 2022 に WAAF もブース出展した。これは国際協力や SDGs などに取り組む官民さまざまな 110 以上の団体が参加するイベントで、コロナ禍前は日比谷公園やお台場で大々的に開催されていた。コロナ禍の中では規模を縮小して対面とオンラインで開催されることになり、WAAF はこの 2 年間、オンラインでの参加のみとなっていた。

今年は若いスタッフが早くから対面型の出展、つまり会場出展を提案し、参加申し込み、説明会、初日は朝早くから現地でブースの設営、参観者への対応などを担ってくれた。私は 2 日目の 11 時から 5 時までの現地対応を担当した。

コロナ以前は飲食のブースも多く、お祭りムードで賑やかだったが、今年は飲食の出展が無かったのでかなり地味な雰囲気だった。だが、以前だったら食品ブースに流れていた人々が一つひとつのブースにしっかり回ってきてくれたのは嬉しい驚きだった。有楽町という土地柄にも寄るのだろうか、若い人が圧倒的に多く、熱心に質問し、また聞いてくれた。中でも嬉しかったのは、過日、「FGM 廃絶活動を支援することは文化介入になるのだろうか」という質問を寄せてくれた高校 3 年生が来場してくれたことだった。短い時間の中だったが、WAAF の設立時からこれまでの一貫した考えや取り組みを話させてもらった。

規模が小さくなってお祭り気分は減少したが、私はこのような在りの方が団体の理念や活動をしっかり人々に知らせることができていいと思った。また WAAF のブースの向かい側にアジア協会アジア友の会 (JAFS) さんが出展されていた (<https://jafs.or.jp/index.html>)。アジア各地に安全な水を届ける活動を行っている団体である。私はたまたま『月経の人類学』で月経に衛生的に対処するには水が大きな役割を果たしていることを読んでいたので、支援している地域の「生理小屋」の写真を含めた活動をととても興味深く拝見した。また JAFS のスタッフさんも WAAF のブースに来てくださり、FGM 廃絶について強い関心を持っているという言葉を受けた。今後、女性の性や人権に関する課題についてお互いにネットワークを構築していければと思う。

(報告：伊藤充子)





## ガンビアーCut No More(もう切除しないで)

<2022年10月11日 UN Sustainable Development Group>

FGMは止めなきゃダメ。

文化は人を傷つけるものじゃないはず。

わたしは思い通りに生きられるはず。

もう切除しないで。

痛みも、涙も、血も、トラウマもいらない。

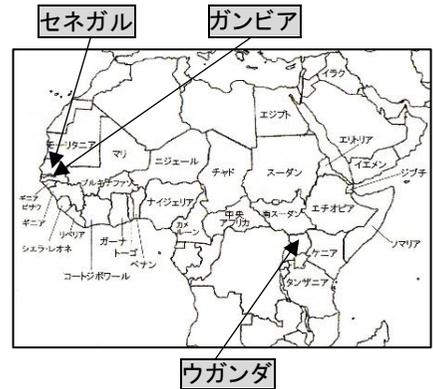
皆で一緒に闘おう。

FGMをする人を見たら警察に言って。

女の子を守って。

無視したら、あなたはずっと後悔するよ。

<歌詞から一部抜粋>



思わず口ずさみたくなるメロディーに乗せて歌われる曲は、FGMの危険を訴える“Cut No More (もう切除しないで)”。ウォロフ語、マンディンカ語、英語で歌われており、異なる民族グループに広くメッセージが伝わるようにとの願いが込められている。

曲を作った Sally Njie と Praise Gimba にとっては、多くの人々に伝わるよう違う言語でそれぞれ適切な言葉を選びながら歌詞を書くことはかなりの挑戦だった。しかし、アフリカやヨーロッパの NGO との提携、SNS の活用、アーティストたちの協力といったチームワークによって、4カ月をかけてこの美しい曲が出来上がったという。

Sally と Praise は、若い女性活動家たちを対象にした1年間のリーダーシップ・プログラムに参加し、その一環として曲作りに取り組んだ。このプログラムは、国連、EU、UNFPA、UNICEF、FORWARD UK により実施されたもので、アフリカから50人、ヨーロッパから16人が参加し、FGM、児童婚、女性と少女に対する暴力の廃絶を推し進める活動やリーダーシップについて訓練を受けた。



<https://unsdg.un.org/latest/videos/lets-sing-cut-no-more-using-music-end-fgm-africa>

## ウガンダ―切除者が懲役4年の刑に

<2022年11月9日 ChimpReports>

ウガンダ北部のモロト県で、13～15歳の少女4人にFGMを施したとして46歳の切除者が地域住民の密告で逮捕され、懲役4年の判決を受けた。被害者のうち3人は国境を接するケニアに逃れ、残り1人は大量出血とひどい痛みで苦しむ中で救助された。この切除者を起訴した検事は、「FGMは女性の尊厳を踏みにじる残酷な行為であり、今後同様の違反を防ぐためにも厳罰を望む」と語った。ウガンダでは2022年はFGMが行われる年にあたるため、当局は警戒を強めている。

切除者が起訴されたのは8年ぶりのことだ。ウガンダでは2010年にFGMを禁止する法律が施行された。だが、古くからFGMを行っているコミュニティでは、人里離れた場所で、あるいは法律が比較的緩いケニアに渡るなどして、いまだにこの慣習を続けている。

<https://chimpreports.com/moroto-fgm-traditional-surgeon-convicted-to-4-years-imprisonment/>

### 2022年4月1日～2022年11月22日までの会費・カンパ・反FGM基金

会費・・・一般会員47名、学生会員1名、1団体会員より頂いています。

カンパ・・・17名より49,000円をお寄せ頂きました。

反FGM基金・・・13名から62,000円をお寄せ頂きました。

※2022年度会費納入用郵便払込票を同封いたしました。尚、既にお振込みいただいている場合はご容赦ください。



### FGM（女性性器切除）廃絶運動を支援してください

FGMとはFemale Genital Mutilation（女性性器切除）の頭文字をとった略語で、女性外性器の一部あるいは全部を切除し、ときには切除してから外性器を縫合してしまう施術です。国連機関の発表によれば2022年現在、アフリカをはじめとして世界30か国以上で2億人以上の女兒・女性がこの慣習の犠牲になっていると推測されます。

FGM廃絶を支援する女たちの会（WAAF:ワーフ）は、FGMが女性の健康を阻害する有害な慣習であり女性の人権の侵害であると考え、FGM廃絶のために立ち上がったアフリカの人々を支持しています。この慣習の廃絶をめざして運動しているアフリカの人々に支援を送り続けたいと願い、活動しています

◆年会費 個人会員3千円（学生会員2千円）/ 団体会員1万円

◆会費振込先 郵便振替：00170-8-580948

口座名：FGM廃絶を支援する女たちの会

**編集後記** 早や2022年も最終月に入ります。本年も当会の活動を支え続けてくださった会員の皆さま、さらに、ご寄付を賜りました皆さま、心から感謝申し上げます。本号で紹介した反FGMソング「Cut No More」を実際に聴き、軽快なリズムの中に悲痛さを感じてしまいました。機会があればぜひ一度お聴きになってください。（YH）

☆掲載記事の無断使用は固くお断りします。©2022 WAAF Printed in